

---

# 雨の中の光

玖月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨の中の光

### 【著者名】

玖月

N5260N

### 【あらすじ】

神楽も新入生も出掛けてしまったある雨の日。松光は雨音を聞きながら、妹になることの無かつた少女に思いを馳せる…。

梨栖さんとのコラボ話です。梨栖さんのお許しは頂いております。

## 1. おこわづ

先週土曜日の12月10日は、梨栖さん家のオリジナルキャラ須藤恋歌さんのお誕生日でした！お誕生日お祝い話にと「リバボ話を書かせていただいたなんですが…。

一週間以上過ぎてて遅い！（…）…！

し、

長い！（…）…！

し、

主役のはずの恋歌がすことも出て来ない！（…）…！

という、実際このお話の主役は恋歌でなく、梨栖さんのオリジナルキャラの一人「出浦時雨」となっているお誕生日お祝いでも何でもない、私が松光と時雨を出会わせたかつただけの欲望の塊となつております。

そんなお話を投稿するのを、梨栖さんは快く許して下さいました…。本当に心の広い方や…。（つゝ）

以下、時雨が大活躍する梨栖さんの作品です！

「銀魂」美しい蜘蛛の巣にかかりて」

<http://ncode.syosetu.com/n0531>

q/

「銀魂」美しい蜘蛛に睨まれて」

<http://ncode.syosetu.com/n6456>

v/

とても素敵なのでぜひ読んでみて下さい！  
読まないと松光がたたつ斬っちゃうぞ！（ 、 ）

## 金髪の少女（前書き）

松光が昔に想いを馳せるシーンから始まります。

メインの時間軸としては、梨栖さんの作品「銀魂」～美しき蜘蛛の巣にかかりて～の過去編、

「～親子は血でなく心で繋がる」と

「～事のきっかけは思いもよらない理由だったりする」の途中のお話になります。

じとじと雨が降る。

折角の休日なのだと若干残念そうだった神楽は、それでも李麻と遊んでくると喜びて傘を片手に出かけて行つた。

新八は例のじとじとライバルのコンサートに、

銀時は髪がハネるとソファーでふて寝してしまつている。

定春も散歩に行けないためカリビングの端っこで丸くなり、誰も構つてくれない暇を弄んで、

松光は玄関を出て1階に繋がる階段に腰掛けていた。

屋根があるため、傘が無くても濡れやしない。

ぴちゅ…と屋根から滴が落ちる音を、ただぼつと聞いていた。

「…」

時折、雨の日には隠しておき出すものがある。

まだ幼い銀時が、吉田家にやつてきてから数ヶ月しか経っていないなか  
つた頃のこと。

父松陽が小太郎や晋助、銀時を保護したように、松光もまた子供も  
を保護したことがあった。

「… 時  
空」

松光の妹になることのなかつた彼女はいま、どうしてこられるのだろう  
…。

あの日も、雨が降っていた。

まだ15だった松光は、松陽や子どもたちが授業をしている間は家事をしていく、その日も下町へ買い出しへ出でていた。

天気予報では降らないと言っていたのに、帰り道で土砂降りの雨に襲われ、具材を濡らさぬよう胸に抱えて、ぬかるんだ森の中を進んでいた。

下町へ行くにはこの森を通りなければいけない。

道が入り組んでいる上に、松光たちが住む村とは別の場所へ向かう道は、斜面も多くて時折怪我人が出る。

自分も転ばないようにしてないとなど気をつけて走っていたら、

数メートル先の地面上に金色の糸が広がっているのを見つける。

首を傾げて何だかうつと歩み寄ってみて、松光は飛び上がった。

「なつ……。」

それは金色の糸ではなかった。

力無く地面に横たわり、気を失っている少女の、美しい金髪だった。

「なつ……」

何があつたのだろう。

言葉も出ず、とにかく生きているのかとそつと首筋に触れる。

雨に打たれて冷えている肌の下で、弱々しくはあるが鼓動はしつかりと伝わってきた。

どうすればいい？

考えているヒマなどない。

松光は上着から袖を抜くと少女にかけ、彼女が極力濡れないようこ抱き上げた。

そしてそのまま、出来る限りの早足で村へ向かつ。

「……や」

少女が何事かを言った。

何だらうと足を止めずに耳を澄ませてみたら、少女の閉じられた瞳から涙が流れているのが見て取れた。

「……おかあさん……」

松光は確かに、その弦を聞いた。

自宅に少女をつれて帰り、ことのあらましを松陽へ伝えた。

少女の着替えと手当せ、近所の娘たちにしてしまった。

幼いこと言ふ少女、気にすると困ったからだ。

少女は全身に細かい傷を負つており、特に左手首と右足首の捻挫が  
酷い。

今は怪我による発熱のため寝込んでるが、手当をしてくれた隣  
のおばさん曰く、年頃の娘にしては妙に痩せすぎているとのことだ  
った。

背格好からして、年齢は松光の弟たちと同じくらいだ。

しかしそれにしてはやせっぽちだと、隣のおばさんは訝しがつて  
いた。

もしかしたら、虐待にでもあつてたんじやないかねえ……。

そんなことを言つて帰つて行つたおばさんを思い出しながら、少女  
を寝かせている部屋へ水を張つた桶を持っていく。

布団に寝かされた少女は熱に麺され、荒い息を繰り返していく。

桶で濡らした手ぬぐいを固く絞つて額にのせてやると、少女の少し

だけ辛そうな表情が和らいだのが分かる。

こんな幼い少女が、何故あんなところで一人でいたのだろう。

あの道は街灯もないため、夜になれば恐ろしく暗くなる。

季節によつては狼も出る。

晋助も松陽と出会つ直前に狼に遭遇し、松陽に助けられたこともあ  
るぐらいだ。

この村に来たかったのか、

はたまた、あの森を通つて街に出るつもりだったのだろうか。

どちらにしろ、幼子一人では危なすぎる。

「…？」

枕元におかれた彼女の私物と思わしきものに視線が止まる。

一枚の紙切れと、手紙一通。

好奇心に負けて紙切れを見てみれば、それはある場所を示した地図だった。

この村から、大人なら数日で行ける距離の場所。

松光も名前ぐらいなら知っている場所だった。

こんな遠くにいくつもりだったのだろうか。

たつた一人で？

「う…」

少女が小さく呻き、松光は慌てて地図を元の位置に戻し、少女の顔色を伺う。

額との温度差が出来たためか汗がにじんでいて、やはり苦しそうな息遣いは收まらない。

額にのせていた手ぬぐいで汗を拭いてやつてると、少女の口が力  
サカサと動いた。

「…あ」

何か言つてこる。

聞き取らうと耳を寄せてみたが、もつ少女は何も言わず…。

しづらじく様子を見ようと立ち上がった時だった。

「…おかあさ…お母さん…」

つづりと溢れた涙が枕に吸い込まれる。

「…」

悪夢を見ているのだろうか、

これは起きてやるべきなのだろうか。

先ほど彼女を助けてから2回も聞いた「お母さん」という言葉。

少女があんなにいたのも、その「お母さん」が関わっているのか…。

「…」

どうすればいいか迷つていると、玄関のほうから物音がすることに気がつく。

廊下へ出れば、松陽が玄関で草履を脱いでいるところだった。

「どうだつた?」

「下町で迷子はいなこらし。下町の子じゃないのかな…」

少女の親が娘を探していたら大変だと、松陽が下町に連絡に行つてくれていた。

少女は迷子札も持つておらず、身元を確認できる物も何もないため、

近くの町村に住んでいるのか遠方から来たのか、分からぬ。

「…親が見つかるまで、しばらく置いてやつていいよな

「もちろんだよ。あんな大怪我をしている女の子を放り出すなんて、出来ないからね」

ほっと息をつく松光の横を過ぎ、松陽は廊下を進む。

そつと少女が寝ている部屋を覗く父親の背に、松光はぶつかりぽつり声を投げた。

「親父が、小太郎たちを拾つてきた理由がよく分かったよ」

満足な生活をさせてやれないからもう拾つてへるなと言つたのは松光だ。

言つた松光が、今回あの少女を拾つてきた。

だが、あんな森のなか倒れている少女を見捨てることがどうして出来よう。

結局この親子は、困っている者を見過すことが出来ない性分なのだ。

「拾ひなんて言葉は悪いな。保護したにしなきや」

お前が優しい息子でよかつたよ。

松陽はやつ言つて松光の頭を撫でて、廊下を進んでいった。

翌朝になつても、松光が保護した少女は目を覚まさなかつた。

松光は一晩中傍にいたものの、少女の容態は変わることなく…。

やせつ譲りで、「お母さん…」と繰り返し口にしていた。

「あの女子、大丈夫かなあ…？」

朝食作りを手伝ってくれていた小太郎がぼんやりと呟き、松光は少しばかり眠気を訴える頭を振った。

松光が慌てて抱えてきた少女を、みな心配してくれていたのだ。

「熱も少しずつ下がってきてるし、大丈夫だよ。今日には田を覚ますさ」

「起きたら、仲良くなれる？」

「なれるさ。小太郎は優しいからな」

そう言つて頭を撫でてやつたら、それはそれは嬉しそうにしゃつ…と笑うものだから、

可愛らしい笑顔が寝不足の頭にクリーンヒットして、倒れそうになつた。

熱は下がつたものの、少女は匂を過ぎても皿を覚めやす…。

家事を終え、昼休みに5人分の昼食を作つたあとでは流石に睡魔が襲つてきて、

少女の傍らでぐらぐらと舟を漕いでいた。

父も弟たちも授業中で、辺りは静かでより眠くなつてしまつ。

眠い眠いと頭で繰り返していたもぞもぞと衣擦れの音がしてハッ  
と顔を上げると、少女がぼんやりと薄田を開けていた。

「起きたか？」

安心して覗き込んだ松光に返つてきたのは、言葉ではなく…。

「がつ…」

左足での見事な回し蹴り。

蹴りと言つよりかはただ振り回した足が直撃しただけなのだが、ヒ

ツトした顎がぽかんと音をたて、ついでに松光の歯もカツンと鳴り合…。

一瞬意識が飛びかけたが、なんとか耐えた。

痛みを訴える顎に手をあてながら見やれば、少女は無理やり体を起しゃうとしていて…。

「馬鹿！ 動くな！」

松光がせつ叫んだ途端、少女は全身を走る痛みに顔をしかめつづくまみ。

松光は心配して、少女に手を伸ばした。

「せひ、だから言つ…」

「近寄らないで…！」

松光の手がぴたりと止まつた。

少女が叫んだ声はとても必死で、ともすれば悲鳴とも呼べるものだつた。

少なくとも、こんな幼氣な少女が発するものではなかつた。

「…悪い。近寄らないから、ホラ。…な？」

ビリビリッと彼女を宥め、その意志を見せるために布団から数歩離れる。

少女はひとまず安心してくれたのか、布団の上で大きな息をついた。

辛そうな息づかいだつた。

「大丈夫か？」

「…いい、いい。」

「俺の家だ。お前、森の中で傷だらけで倒れてたんだ」

覚えてるか？ そう聞いたら、少女は何かを思い出したようにハッ

と顔を上げた。

「い、行かなきや……」

慌てて周りを確認し、枕元に置かれていた手紙と紙切れを掴む。

そして立ち上がりうとするものだから、松光のほうが慌てた。

「オイ、馬鹿……！」

「あや……！」

ついた右足に激痛が走ったのだろう。

痛みに顔をしかめて崩れ落ちるものだから、松光は慌てたまま少女へ駆け寄る。

床に倒れてしまいそうな少女の細い肩を支えるものの、少女は松光から逃れようと身をよじる。

「手足ねんざしてんだ。大人しく養生してろ」

「私」こんな所で止まつてゐる場合じやないの！ 今すぐ行きたい所があるの！」

「こんな怪我で行けるか！ 治るまで養生していけ！」

「いやー。」

「いやじゃないー。」

暴れる少女を宥めようと押されると、少女は必死に松光を押しのけようとくる。

何故そこまで行きたがるのか、松光には分からぬ。

「おや、目が覚めたんですね」

呑氣な声がして、少女はぴたりと動きを止めた。

顎を押しのけられて上を向いていた松光も、横田で声をしたほうを見やる。

案の定、入り口には松陽がのんきに笑っていた。

「傷だらけだつたので、驚きましたよ。具合はどうですか？」

「…もう、平氣…」

「そうですか、それは良かつた…。足の怪我が酷いので、しばらく休んでましょうね」

松陽の笑顔に少女も毒氣を抜かれたのだろう。

松光を押しやつていた手から力が抜け、「はい…」と小さく呟きが漏れた。

教師をしていくだけあって、松陽は子どもの扱いに長けていた。

この点では、松光はまったく適わない。

「私はここで塾講師をしている吉田松陽といいます。彼は私の息子

の、松光。貴女のお名前は？」

ぐつと詰まつた少女が、そのまま俯いた。

吉田父子はしばらく待つたが、少女は口を開こうとしなかつた。

「… 言いたくなければ、それでいいですよ」

松陽が柔らかく言い、少女はおずおずと顔を上げた。

「お腹がすいたでしょ。いまお粥を作つてきますね」

そつ言つて立ち上がつた松陽の足を、松光が慌てて掴んだ。

「？ なんだい松光」

「作るつて親父が作る氣か！」

「やうだよ」

「そりゃりと言つたな！ 親父が料理なんかしたら厨房が全壊の上に折角起きたコイツが倒れるぞ！」

失礼だなあと眉を寄せた父親を無理やり座らせ、松光は変わりに立ち上がる。

「俺が作るから余計なことすんな」

「今日は上手く作れそつた氣がするのに……」

「頼むから氣がするで厨房に立たないでくれ……」

いいから親父も待つてろと言い残し、松光は部屋を出た。

そしてやつと田舎めた少女を思い出した。

弟たちと近い年のように見えるのに、妙に大人びているのは、

そして表情が乏しいと思つたのは、

松光の氣のせいなのだろうか…。

続  
<

## 金髪の少女（後書き）

時雨が起き様に松光を蹴り飛ばしたシーンは、時雨が銀さんたちに初めて出会った時に銀さんの喉笛を蹴り飛ばしたシーンのパロディでした。誰かに殴られてカチンと歯が鳴るシーンを書くのが、私は好きみたいです。（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5260z/>

---

雨の中の光

2011年12月17日22時49分発行